

早稲田大学第一文学部卒業。東京大学司書退職後、中国、スリランカ等の大学で日本語教育を担当。現在、「日本語談話室」主宰。

「控えめ・慎みを失った日本文化」

かつて外国の大学で日本語を教えていた筆者には、外国人の教え子たちから、日本語に関する質問が、時々メールで寄せられる。辞書を引けば、大まかな意味は分かるが、その使い方のTPOは外国人には難しい言葉もある。彼らに分かり難い言葉の中には、現在ではもう使われなくなった「太陽族」、「全学連」のような死語もある。また、死語とは言えないまでも、余命少ないと思われる言葉もある。「明解国語辞典」(三省堂)では、この種の言葉を、「老人語」と称している。一般的には、殆ど使用されず、老人しか使わないので、いずれ消え去るであろう言葉、「湯殿」などがそれである。

最近受けた質問の中に、「さりげなく」という言葉があった。質問した人は、日本の大学に留学した経験もある優秀な学生だったが、この言葉を聞いたことがなく、使い方が分からないと言う。別の人からは、「たしなむ」という言葉について、同じような質問があった。これまた、今では、死語か老人語に属するものであろう。

「さりげなく」は「さり気なく化粧する」などと、目立たないようにする言動を言う。やたらに目立つことを良しとする風潮、自己PRなど絶えず自己主張をしていないと、足元を掬われるような熾烈な競争会では、「さりげなく」する親切や、控えめな言動が霞んで見えるのは至極当然かも知れない。

「たしなむ」という言葉は、何かコトが起こることを予想して、密かに用意したり準備したりしておくことを言う。それが実用にならなくてもよい。戦前多くの文化人に「好きな言葉」をアンケートしたら、この言葉が断然一位だった。

以上挙げた、「さり気なく」や「たしなむ」は、言わば日本人の控えめな態度や謙譲の美德を評価する社会でこそ、生きる言葉である。現代の「オレがオレが」と自己を押し出す社会には馴染まない。

しかし、世の風潮には逆らうが、さりげない言動や、目立たず自己抑制の利いた、控えめな物腰を評価する謙譲の文化を、もう一度見直してみても如何だろうか？間違いなく、以前の日本には、「さり気なく」部屋の一隅に花を飾るような、謙譲の文化があった。ぎらぎらと欲望剥き出しの競争や、押し付けがましい商業主義から一步引いた控えめな文化が確かにあった。

言葉というものは不思議なものである。その言葉を知ることによって、今まで見えなかったものが、はっきりと見えるようになることがある。最近、「花眼」という言葉を知った。「老眼」のことである。老人になって、本当の花の美しさが分かる、という意味である。以来「老眼鏡」を「花眼鏡」と呼ぶことにしている。老眼鏡をかけるのをためらっている友人が僕の命名法を知って、一転、老眼鏡をかけることが嬉しくなってきたことにした、と話してくれた。

ぎすぎすして潤いのなくなった日本の社会に、「さりげなさ」や「たしなみ」という言葉をもう一度復活させることによって、かつて在った、落ちつきや控えめ、繊細な感性に基づいた価値観が再生することを願っている。

山脇学園高等部卒業後、4年間商社勤務。61歳でマイクロソフト社の「MOUS初級」を取得。現在、パソコンシルバー会を主催。

「シルバーパソコン塾の窓から」

自分では有料ボランティアのつもりで、自宅で小さなシルバーパソコン塾を昨年開いた。既に高齢者と言われる六十五歳であった。

四十二歳の時自活する必要に迫られたが学歴も高卒で特技や資格もないためブティックや宝石店などで販売員として働いてきた。六十一歳で退職し、それからパソコン教室で一番易しい初級の免状を取得した。

人と少し違うところと言えば、二十数年間通勤電車で常に本を読んでいた事位だろう。

思えば昔は電車の中で本を読んでいる若者が多かったが、最近ではほとんど見かけないのはどういうことなのだろう。

閑話休題、子供が独立し老親達も旅立ち、これから自由な長い老後が待っている方へ、一年余り五十数名のシルバー世代とパソコンを通して交流した感想を伝えたい。

受講生の最高齢は八十六歳で大正生まれは今までに五名受講し、六十代は七十代より少し多い程度だ。動機はインターネット、メールをしたい、年賀状を作りたいなどだ。

二十回を終了した時、七十五歳の無口な男性は同期会の案内状をイラスト入りで見栄えよく作る事が出来た。

パソコンのマウスの操作は、加齢と共にぎこちない動きの人も多くなるが練習すればいずれ解決するから大した問題ではなく、考え方の柔軟性と根気のあるなしが重要だ。

今習った方法を以前に教わった別の事柄に付け加えて自分で膨らませてみるとか、習得した技術を応用してみるとかで関連付けが出来てくる。そうするには学校で習った知識のほかに職場や家庭などでの実利的な方法、読書、音楽、絵画等からの感動が有機的に脳内ネットワークとして機能している事が重要だ。横のつながりが無く一つの操作方法だけが独立してしまうとどうしても一度押し込んだものが頭からスルスルと抜け出す。

永年人の上に立っていたからとか家庭をしっかりと健全に維持出来てきたからと言って、そのネットワークが今も健在とは限らない。

オヤッと思ったら人名辞典、年表などを操れば綻びた網はすぐ塞がる。安上がりだし思わぬ拾い物をする事もある。事に当って適切な解決方法を見つけ出せる柔軟な思考力を望むなら常に頭を自分で耕しておく事だ。

次にパソコンに関しての根気の問題だが、パソコンの解説書はやはり読みにくい。

此处で過去に難解な本を斜め読みしなかった人達にご褒美が出る。このグループには根気よく語句をつぶしながら文章を読解する習慣が付いているから読みこなす事が出来るのだ。しかし負け組みになってもめげてはいけない。遅ればせながら根気よく解らない言葉をパソコン用語辞典で引きながら、段落ごとにゆっくり理解してゆくのだ。急ぐ必要は無い。

やる気のある人はMY用語辞典を作っている。自分から能動的に獲得しに行った知識は、自分が消化できる量なので忘れにくい。

しかし物忘れ対策には反復練習だけが有効手段という事もでてくる。それを努力と言う姿勢ではなく楽しみとしては如何だろうか。時間はたっぷりあるのだ。

期待される老人像は、ご大層なものではない。健康問題は専門家に譲るとして次の枠組みを守った後はボランティアよし趣味に生きるもよしで、自由に最終章を飾ればよい。

- 1 横着をせず常に頭を耕しておく
- 2 過去の栄光を語らない
- 3 体の不調を訴えない
- 4 人の話をよく聴く

この最後の項目がなかなか厄介で、明るく元気な人達はややもすると独演会を演じている。これは厳に慎みたい。

東京水産大(現東京海洋大)卒業、藤田観光(株)を定年退職。平成9年11月「二度とない人生だから」(蒼文社)出版。

「いつまでもときめいていたい *70歳が53歳の女性にアタック*」

60歳で会社を定年退職して10年が過ぎた。当初、平均寿命80歳までの20年間は、五体満足で人生をエンジョイすることを目標にした。そして10年経過した今、70歳。自分としてはほぼ満足のいく暮らしではあった。だが、ここ1~2年、どうしても埋め難い何かを感じるようになった。それよりは独り身の寂しさである。42歳で離婚して以来の長い独身生活。もちろん再婚を考えて付き合った女性はこれまで数名いた。ところが全部フラれてしまった。一番長く付き合った女性とは18年目にフラれた。(定年後結婚の約束)その時彼女60歳(定年)小生68歳。暫く女性不信に陥った。もうこの年で新たに女性を求めるのはとても無理だ。故郷の田舎に帰って、先祖の墓守りでもして余生を暮らすしかない。真剣にそう思った。

その頃、私は大手ショッピングセンターのグリーター(お客様案内係)をしていた。派遣会社から週二日の派遣勤務である。仕事柄館内の巡回もあった。ある日、洗面所に入ると清掃婦にはめずらしい若い女性(といっても50歳前後か)がテキパキと仕事をしていた。そんな光景を何度か目にしたある時思いきって声をかけた。「君、名前何ていうの」相手は悪びれもせず「萩原エリ子です」と答えた。フーム、素直だな。印象は悪くない。そしてまた数日後、思い切って尋ねた。「君、独身?」「ええ、そうよ」内心、ヤッター!こうなるともう自分のトシなんか念頭になくなり、巡回の度に彼女の居そうなトイレを探して?アタック、アタック、アタック。とうとうデートを約束するまでこぎつけた。

しかし結婚するまでそう簡単に事が運んだわけではない。その後、居酒屋で飲みながら、一泊の温泉旅行に誘った。ところが彼女はウンといわない。問い詰めると以前から付き合ってい

る彼氏がいるらしい。そりゃそうだ、これだけ魅力的な女が独りである筈はない。そこでこっちもファイトがわいてきた。負けてたまるか！だが一抹の不安がある。彼女の年齢は53歳。おいらとの年齢差は17歳。ウーン。だがこのチャンスを逃したらもはや永久に伴侶は現れないだろう。かくして精神状態は完全に昔の青年のそれと化した。それにしてもどこからこんなにエネルギーが出てくるのだろうか。詳細はスペースがないので割愛するが、とにかく今思うとガムシャラに突っ走ったのは確かである。後日、改めて最初の頃の僕の印象を妻に聞いてみると、こちらが声をかける以前に、「今度受付にロマンスグレーのスーツ姿のいい男が立っている」という噂？は知っていたとの事である。

そうこうするうちに、ショッピングセンターの仕事も70歳で終り、そうなるやと平塚のアパートから川崎に住んでいる彼女とデートするのが、距離的にも時間的にも無駄が多い。それである日、そのことを言うと、彼女いとも簡単に「それならウチに来たら」「エッ、いいの？」「エエ、いいわよ」その瞬間に、これで決まった、と思った。ライバルに勝った！という喜びもさることながら、これで正式に結婚して彼女を終生愛し続けられる、という嬉しさが、こみあげて来た。

一度は結婚は無縁と諦めていたのが、土壇場で敗者復活戦に勝ったという思いである。我々はそれぞれ子供が二人いる離婚経験者。孫は夫が3人、妻が1人。幸い親族はこの結婚に誰も反対しなかった。平成16年12月15日（水）大安吉日に、二人だけで川崎市宮前区役所に婚姻届を出した。因みに保証人は妻の母親と弟である。最後に、サムエル・ウルマンの詩（一部）を掲げて結びとしたい。“たとえ髪が白くなり、皮膚の皺が増そうとも、心みずみずしく、明日への情熱を失わなければ、青春は永遠なり”

*この小文は、後に続く団塊の皆さんに“二度とない人生”を全うして頂きたい贈りたい。

岐阜青年師範学校本科卒業後、関市内の中学校で教職を務め、62年退職。

「老いてこそ輝いて生きる」

私もことし齢七十八を数える。人生の円熟期をよりよく生きるために、自分を再考し限りない明日への一歩としたい。

“老いる”とは年を取ることで、私たちは誰もが確実に年をとる。若い頃は心身ともに元気で多少の無理は平気、そのうち次第に体のむりが利かなくなり衰えが現れる。

この体力の衰え以上に配意しなければならぬのが心の衰えだ。たとえ、肉体は衰えても心は絶えず若々しくありたいと願うのは私ひとりではないだろう。

日頃、親しい友との会話のなかでお互いの体力の衰え、物忘れ、視力、聴力などが話題になり「その通り」とのことばで終る。

このことは事実には違いないけれど、そのことに心を奪われていては人生の悲哀のみが脳裡を駆けめぐって、淋しい限りと云わざるを得ない。

生きているのが精一杯というのではなく、“あれもしよう” “これもしよう” “明日はこれとあれをやらねば” という気持ちを持ち、人生は常に挑戦であるとの気迫を胸に前進したいと願っている。

私は今、幸い人と結びついた仕事を二つ持ち合わせ、生き甲斐として頑張っているきょうこの頃である。

そのひとつは、私が十八才の時、満州（現在の中国東北地方）への渡航に夢を託して学んだ中国語が蘇生して、今、来日中の研修生に日本語を教え、ことしで十四年になる。

私には若い日の大陸へのあこがれがよみがえったようで、彼等の若さと真摯な姿勢に感動し週二回、夜間の学習に精を出している。

帰国した研修生は八十余名。私も彼等の職場訪問とそれと兼ねた中国旅行は数えて十九回。旅程表や切符は自分で手配し、独り旅が楽しめるようになった。

発音が難しい中国語にも少し慣れ、会話を通して意志の疎通が図れ、手紙も書け読め、文通による書簡も厚さ七十五センチになり、集大成として、今、整理中である。

次に、私が二十才の学生時代（終戦前後の食糧難のころ）世話になっていた下宿のおばさんの好意に助けられ、一日二食主義の生活を切り抜けることができた。

この忘れ得ぬ貴重な恩恵に報いるべく取り組んだ学生寮の仕事が、今年で三十年を迎えた。

現代は豊かな時代背景と共に、ワン・ルーム形式の学生下宿が主流。私のところは共同生活（バス・トイレ、共有）を主体とした、十九名の女子大学生の寮である。

しかし、『部屋代が安い』『親代わりの世話』との風評があっただけか、毎年、満室である。

現代っ子を預って世話をするという仕事は絶えず苦楽を伴なうし、責任も重大。親さんの『信頼』学生への『愛情』をモットーに休まない日々を健闘している。

さて、私は健康に恵まれ今日に至った。六十才の時、胃がんの全摘出手術を受け今年で十九年目。食生活にはいろいろと抵抗があるがあまりこのことに気をつかわないようにしている。

かつて、六十キロあった体重は現在、四十五キロ。往時と比べるとすばらしい減量？スマート。瘦身だけど、気力でカバーし、健康管理に鋭意努力しているのが現況だ。

古人の名言「早寝、早起き」を鉄則とし『人から喜ばれるきょうの自分』の座右の銘と縁あって私に与えられた二つの取りくみを自分のライフ・ワークとして頑張っていきたい。

東京外国語大学イタリア語科卒業。テレビ映像制作会社経営、マンション管理に従事。現在無職。

「私はまだ^{こうれいしゃ}孝齡者」

小学校卒業以来四十何年目だかの同窓会だったから、みんな六十に近かった。今度は何時やろうか、という事になって、そりゃあ還暦同窓会でいこうやと決まった。そしてその日、いつもの顔ぶれに二人が欠けた寂しさがあったが、ほとんどが変わらない姿を見せ合った。「六十は人生の折り返し点」などと意気軒昂だった。やがて多くが六十五で定年。暇ができた奴から、外国旅行の葉書が届いたりしていたが、七十歳になるとさすが音信が遠のいた。

私は七十二歳までマンションの管理人をしていたので、旅行に出かけるゆとりは無かった。退職して、いざ時間だけはたっぷり出来たものの、今度は金のゆとりが無い。

マンション管理の現場で培った経験を生かして、なにかやれないかと考えていたら、マンション管理士の国家資格をとったらどうだと、もと勤務先の管理組合の理事長さんがヒントを下さった。そのマンションでは日頃の勤務を評価してくれて、幸い居住者の皆さんにも親しんで頂いていたので、新しい後任者が馴染むまで教育かたがた出向いて欲しいと望まれた。自主管理をしているのならとにかく、管理を委託している管理会社に厳しく注文をするのが先決だ。一般的なチェックは経験上の知識があれば、別に管理士の資格なんか無くても出来る。時代の要求などと謳っているが、意欲的な理事長さんがいれば大した出番は無い。中途半端な資格だと思った。

七十を過ぎてても、その後の同窓生の訃報に接することが無い。みんな長生きしている。

それどころか、母が百歳になった。申し訳ないことだが、経済的な事情で姉に面倒を見て貰っている。「私自身がもう介護が欲しい歳になったのに」と嘆かれて、慙愧の思いに打ちひしがれた。そこへもってきてこの夏、家内が硬膜下血腫で手術をし

て、退院後の介護にヘトヘトになった。マンションの管理より、マンションでの介護問題に切実感を持った。近所に大学院の建築学科を出たお嬢さんがいて、「建築現場はやはり男の世界で、自分の出る幕がない気がする」と弱気で悩んでいた。考えた末、同じ建築関係の分野で働ける福祉住環境コーディネーターの資格をとってみると言う。それこそ私の取り組むべき分野ではないか。要項を教えてもらい、一緒に受験勉強に励んだ。

そもそも高齢者とは何か。抱えている社会問題。病気、介護、その施設、要員、手続きから、バリアフリー、車椅子、ベッド、リフト……。いやあ、勉強になった。国が制度を考え、手を打ってくれていることに多少安心した。そして、自分を始め知識の乏しい人の多いことに驚いた。

試験場には若い人が沢山いた。日本の若者も捨てたもんじゃないと頼もしくも感じた。年配の人結構いた。みんな真剣だった。

二級に合格した！しかし、さすがに七十三歳では職場は歓迎はしてはくれないだろうなあとは気が重かった。ところが、人材派遣の仕事で成功して手広く事業展開をしている後輩が、「会社を創ったらいかがですか。資金は出しますよ。人材をまとめるのがお上手だから、若い資格者のマネジメントをなさればいい」と、お上手を言う。会社経営はまた別の能力だし、ちょっとしんどいなあ。第一、管理人の仕事が始めたのも、もともと自分の会社を倒産させた結果でありますから……。

建築学修士のお嬢さんが目を輝かせて、協力を申し出てくれた。今度は一級に挑戦することになった。

おい、同窓の友よ、ひょっとしたら、君らの介護の相談に乗れるようになるかも知れんぞ。その前に、もうすぐ百一歳になる母を看取りたい。私はまだ「孝齡者」^{こうれいしゃ}でいなければならん。超高齢者社会を支えて頑張ろう。

元地方公務員。

「国民皆保険医療制度の維持」

つい最近、知人から聞いた話である。

ある男性が、アメリカへ一人旅に出掛けた。ところがその途中、大病をしてアメリカの病院に三カ月入院した後、亡くなった。しかも、悲嘆に暮れていた奥さんに突き付けられたのは、病院からの多額(二億七千万円)な治療費の請求書だったという。奥さんは、泣く泣く家屋敷を四千万円で売り、無一文になって何とかけりをつけたそうだ。これが事実であれば、たとえ旅行のさいに医療保険に未加入だったミスはあるにしても、あまりにも無茶な話ではないか、と思った。十年前アメリカに留学していた息子も、高い医療保険料や高額な病院の治療費を嘆いていたので、知人の話も全く嘘っぱちな内容ではなさそうだ。

それに比べて、日本の国民皆保険医療制度のすばらしさを、改めて再認識した。

だがしかし、このところメディアでいろいろと取り上げられている、この皆保険制度の将来は、どうであろうか……。

端的に言って、国民の医療費給付は際限なく膨らみ続けており、その最たるものが老人医療費である。厚生労働省の推計では、国民医療費は二〇〇四年度の三十二兆円から二十五年度には六十九兆円に急増する。この間七十歳以上の医療費は、十三兆円から四十一兆円へと三倍に膨れ上がる見通しだという。

このままでは各医療保険の財政が危機にひんし、国民皆保険制度自体が破たんしかねない状況だというのは、火を見るより明らかだ。高齢者も、大いなる不安と焦りを感じている。

それでは、どうすればいいのか。

今政府では、混合診療や大幅な患者の自己負担増、診療報酬の引き下げ、医療費の「マクロ管理」案など、総合的な医療制度改革が検討されているようだ。

でもこれからは、政・官・業の一体的な取り組みだけでなく、

医療消費者である国民一人一人が己の命にかかわる最重要事だと認識して、真摯に考え、活発に発言し行動することが求められているのではないだろうか。

先日、あるボランティアの集まりで、七十代の女の人が、「納めた健康保険料を、少し還元してもらいたいと思う」と言った。

若い時から食事、心の持ち方、運動などの自己管理を徹底してきたから、これまであまり病院にかかったことがない。もし個人の健康維持に対する奨励措置として、保険料の減免や還元措置があれば、それが弾みとなって、もっと健康への自助努力をする人が増えるのではなからうか、との主張である。さらに、

人の命は、もとより天にうけて生まれつきたれども、養生よくすれば長し、養生せざれば短し……これみな、人の仕業なれば、天にあらずといえり…… という貝原益軒の『養生訓』を引用しての話は、説得力があった。

が、私は共鳴する部分もあるが、健康保険料の直接的な減免には異論がある。それよりも、点数制の「健康保険貯蓄制度」を設けたらどうか、と考えている。

具体的には……日ごろから自分の生活の質を高めて健康を維持し、医療費を使わない人は、年々、一定の点数を積み立てていく。六十歳過ぎてから病気になった場合に、その点数を使って医療費を減額する仕組みだ。

とにかく、「予防は治療に優る」との思想のもとに、医療体系の基本的な発想の転換が大事ではないか。そして、それを効果的な施策にするために、政府は健康や医療に関する情報の提供を徹底してもらいたい。特に西洋医療だけでなく、それを代替する医療や食生活関連まで含めて、幅広い正確な情報を発信してほしい。そうすれば官民あげての積極的な努力で、老人医療費を軽減し、国民皆保険の医療制度は維持できる、と信じている。

平成6年、建設省退職後、(財)民間都市開発推進機構へ就職、平成14年退職。

「四国遍路の新たな宿泊施設についての提案」

私は、今年の5月中旬から6月末までの45日間サンティアゴ巡礼のため北スペイン地方を歩いてきました。巡礼を行った動機はテレビの世界遺産の番組を見たのがきっかけで私も中世のスペインの趣が残っている古い小さな村々を歩いて廻って行く旅を何時かはしてみたいと思いました。今年サンティアゴ巡礼が実現してフランスのピレネー山脈の麓の村からスタートした時はなんだか夢見心地の状態でした。スペインの日陰のない広い麦畑の中を一人で歩いているといろいろな事を思い出したり考えたりしてしまいます。日本にもサンティアゴ巡礼に負けない四国遍路があり、20年前には高松に住んで四国の建設行政に携わったことがある者としては巡礼路を歩いていると四国遍路と比較して考えてしまいます。サンティアゴ巡礼には世界の国々から大勢の人達が訪れ、安価な料金で泊まれる「アルベルゲ」という宿泊施設を毎日利用して旅を続けます。そして年間6~7万人の巡礼者達は約800キロの距離を歩いて最終目的地であるサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指します。巡礼路は国によって整備されて、地元の人達によって下草も綺麗に刈り取られ安全で楽しい旅をすることが出来ます。宿泊するアルベルゲですが、これは地方自治体、宗教団体、私設等がそれぞれが管理運営をしており、一泊が千円以下で利用できます。アルベルゲは全ての村に在るわけではありませんが少し大きい村には設置されていて予約をする必要はなく利用することができます。巡礼者はその日の体調によって宿泊地を決めます。また、目指すアルベルゲが満員の場合は次の村のアルベルゲまで行くか或はホテルや民宿があってそちらも予約はなしで泊まることができます。アルベルゲは大きい施設でも収容人員は100人程度で、設備は広い室に2段ベッドが並べられていて、便所とシャワーそれから自炊ができる台所が付いているだけです。食事ですが、夕食は近くのレストランで巡礼定食が千円程度で

食べられ、朝食と昼食は BAR という喫茶店のような店でコーヒーや軽食を摂るか、あるいはスーパー等で食品を求め何処か適当なところで食べます。

四国遍路についてしてみると、四国八十八ヶ寺の巡礼に年間で 10～20 万人の遍路が四国を巡っているようですが、その大半は車やバスを利用していて遍路の本来である「歩き遍路」は 1,000 人程度だそうです。「歩き遍路」は四国の美しい自然と地元の人達のお接待の文化に触れ、人の温かさに感動し、自分という人間・人生を再認識できる旅です。

四国遍路について私自身に体験がないためにホームページで体験談を読んでいましたら、『歩いているとき適当な所に宿を見つけることが割合に難しい。見つけた民宿は大抵の場合お年寄りがやっている。若い人がほとんど見当たらない。この状態が続くと民宿はなくなり、歩き遍路の場合野宿を余儀なくされるようになる可能性がある。』とあり、近い将来には「歩き遍路」の姿を見ることは難しくなるのではないかと危惧していました。遍路をするうえで一番大切なのは宿泊です。しかも四国遍路の場合は 3 日先までの宿は予約をしておかなければならないそうです。「歩き遍路」が毎日予定どおりに歩けるとは限りません。その日の体調あるいは足の具合によって歩く距離は違ってきます。

四国遍路にもサンティアゴ巡礼地にあるようなアルベルゲの制度をぜひ取り入れて頂きたいと思います。宿泊施設の充実が「歩き遍路」の増加につながり、それに伴う四国四県の観光事業にも大いに貢献すると思います

これからは団塊の世代と呼ばれる人達の退職を迎え、そのなかで心の整理を必要とする人のためにも四国遍路は重要で益々盛んになってくると思います。そのためにも四国遍路に関係する県・市町村そして宗教団体に対して宿泊施設の充実についてアルベルゲ制度の取入れを提唱します。

中央大学通信課程を卒業。45歳から司会業を始める。現在、ミュージカル劇団ティンカーベル旗揚げ公演のために稽古中。

「六十三歳の演劇少女」

お星様の五つの角に男の子と女の子がぶらさがっている。「星をさがしに～Findeng Your Star～ミュージカル劇団ティンカーベル 旗揚げ公演」のチラシができてきた。来年三月二六日、隣町の文化会館小ホールでの上演が決まり、今立ち稽古に入っている。輝きたい自分、人生にごほうびをあげよう、自分たちの舞台を作ってみようよ、等々、小さなつぶやきが共鳴し合って、ミュージカル劇団の発足と、動き出してしまった。

四人の子どもたちの二番目が台本を、曲も詞もうんうんいいながら書き上げた。長女はチラシのイラストを、三女は仲間を集めて事務局担当、四番目の長男もいつのまにかソロを歌う役者に。もちろん母さんも「星の王子様」役。幕が開いて私の台詞「やあ、精が出るのう、星つかい長のネリルよ」で物語は始まる。

母さんが上がっちゃうとみんなペアだよ、と誰も言わないけれど、私は密かにプレッシャーを感じ、「これは大変じゃ」と思っている。

自称演劇少女のまま、歳を重ねて六十を過ぎ、孫三人に恵まれたおばあちゃんの私。中学・高校と放送劇団に入ったり、小さな演劇集団の研究生になったり、ひたすら「女優さん」を目指していた私の夢は、身体が弱くていつも大事なときに持ちこたえられず、「いつか好きなお芝居をしたらいいよ」と言われたのが殺し文句、「今にできるよ」と思いながら結婚出産子育て。板の上で演じる夢をあきらめてもっぱら観る人、楽しませていただく人になっていた。

いつか自分たちの劇団を作って自分たちの芝居をして、たくさん、生活にちょっとくたびれた人たちを励ましたい。これが長い長い間温めていた私の大事な夢だった。大人になっても、時折、むくむくと心の奥底から湧いてくるのを感じていた。特に東京で何カ月ぶりかのお芝居見物の後の夜など、寝ている子

を起こしてしまったように胸がザワつく。

「いつかね」と、自分に言い聞かせている自分があった。

夢ってサ、昼間見るものよ、なんて子どもたちには言いながら、自分はどうなのさ、となると、六十を過ぎて諦めるのはちょっとしゃくな気がする。もうあと残り時間の決まっている今、精一杯やり残しのない生き方がしたい。そんな思いが子どもたちに通じてしまったのか、次女がミュージカル劇団を作りたいと言いだし、三女が友達に呼びかけ、この指とまれで集まってきた総勢三十名、親子姉妹が十一組と五人の仲間。準備万端整うまで待つより、その気になったとき始めようよ、とGOサインを出してしまったら、若い力が本当に動き出してしまった。

東京に行けばなんでもあるけど、文化が中央に集中しすぎている。自分の暮らす街で自分たちの文化を創ろう、が私の長年の主張だった、ミュージカル劇団を立ち上げてみると、いろいろな分野の専門的な人たちが力を貸してくれる。歌の指導者は埼玉から駆けつけてくれている。演出家も心意気が気に入ったと仲間入りをしてくれた。みんなきらきら輝いているからすごい。

初めは楽屋でみんなの出入りの手伝いをしようと思っていたのに、「おばあちゃんが出ないとお客の動員がきかないよ」と言われて一役買うことにした。何十年ぶりかの台詞にとまどいながら、ウキウキワクワク、今これが私の人生の集大成かと思ったりしている。

神戸商大卒業。ユアサ商事(株)入社、営業本部長、取締役、監査役を経て平成10年退社。

「私の夢」

40年に余る長い会社生活を終え、残された第二の人生をどのように送ればよいのか迷いの日々がしばらく続いた。

さいわい自宅から遠くない地にNHKの放送大学があり、年齢を問わず門戸が開放されている事を知った。戦後の混乱期に学生生活を送り、落ち着いて満足な教育を受けなかった私は、青春の日を取り戻す為に入学を考えた。

併し、いざ学ぶとなると会社生活を終えた今、実務的な学問は今更必要とも思えず、結局内面的な精神生活を充実する為に哲学、文学、宗教等の分野に限定された。思い惑っていた所、知り合いの住職から薦められたのが京都西本願寺経営の中央仏教学院であった。

妻が寺の出身であり、母が親鸞聖人を開祖とする熱心な真宗の門徒という環境にありながら、全くといってよい程宗教には関心はなかった。

そのような私が入学を決断した一因に、30年以上も前の南米でのある出会いがあった。

当時ペルーのリマに駐在していた私が、隣国ボリビアに出張しラパス空港に降り立った時、呼吸困難に陥っている初老の日本人を発見し、ホテルに案内し看病した事があった。

ラパス空港は高度4000メートルを越え、酸素が希薄の為、高山病に陥る人が多い事で有名であった。その老人は、千葉市大蔵寺の住職で大正大学の教授と淑徳短期大学の学長を兼ねておられる長谷川良信先生であった。

ブラジルのサンパウロ郊外の浄土宗分院での布教活動を終えての帰途であった。

その夜、健康を回復された先生から色々と宗教論を承った。その時の内容は殆ど覚えていないが『宗教は決して死後の為にあるのではなく、現世をいかに安らかに生き抜くかの為にある』との言葉だけは鮮明に心に残っていた。

かくして放送大学を止め、中央仏教学院への入学を決意した。仏教学院に籍をおいて2年の歳月が流れた。後一年すれば、卒業し得度し僧籍を得る事が出来るだろう。併しながら、私の心は迷っている。難しい仏教用語が際限もなく現れる。果たして何人の方がこの難解な言語を理解できるのだろうか。宗教は理論ではない、信仰であると言う。併し、現代人にそのような盲信を説得できるのだろうか。現代の言葉で、現代の世相を背景に昔の経典も又現代風にアレンジしてこそ、現代の人々に受け入れられるというものだろう。

卒業後の抱負を求められ

『過疎地での老人の医療問題が騒がれている。人間の肉体的治療もさる事ながら、それ以上に心の治療、心のよりどころを求められているのではないだろうか。後継者としての僧なき寺がふえており、死後の不安に悩む老人が多いと聞く。可能であれば将来廃寺の僧として、老人の友として些かでも役にたきたい』との希望をのべた。

私の住む千葉県でも、宗派に関係なく、僧のいなくなった廃寺は結構多い。

過去からの世襲制を順守する事は酷というものかもしれない。寺に生まれたと言うだけで僧になり、人々の心の糧になれるような時代ではない。世間の風波を経験し、葬式仏教の僧としてではなく、目的意識を持った僧の出現を今日程求められる時代はないのではないだろうか。社会生活を経験し、人間関係の複雑さを身をもって経験した後、宗教に目覚め、あるべき姿の僧として人々の心の友となる事こそ、最も望まれる姿ではないだろうか。

雪に閉ざされ、過疎の僻地の荒れ果てた寺院で、孤独な老人の話相手として、最後まで生を楽しむ生活を夢みる昨今である。